

# 細見谷溪畔林と十方山林道

## 第七章 西中国山地の魅力

AKIMASA.NET

<http://www.akimasa21.net/>

21世紀は環境の世紀

## 第1節 吉和(佐伯郡)と私

### 団塊の世代一期生

私は、<sup>つちのえね</sup>戊子年1月(昭和23年、1948年)備後国(広島県東部)に生まれた。いわゆる「団塊の世代」一期生である。小学校入学(尾道市内)直後、広島市郊外(安芸国)に移転。現在の広島市安佐北区(太田川左岸)安佐南区(太田川右岸)を経て、小学校4年冬より佐伯郡五日市町(現、広島市佐伯区)に落ち着き(五日市小学校卒)高校卒業までを過ごした。

中学・高校では陸上競技部に所属した。トラック競技が主で、400m(中学)、800m(高校)を走り、冬季は駅伝にも出場していた。

五日市中学時代(指導:沖井義彦先生)の陸上競技大会は、佐伯郡・大竹市<sup>1)</sup>を一つの単位として運営されることが多く、レベルの高かった大竹中学を目標にしながらがんばった。そして、同じ佐伯郡内の広島県立廿日市高等学校に入学してからも陸上競技を続けた。

### 中国中学校駅伝(呉～広島間)

中学時代の一番大きな駅伝は、中国中学校駅伝であった。呉～広島間、約28kmを8人でつなく駅伝であり、第1回大会は、戦前の1938年(昭和13年)11月30日に、正式名称「軍都連絡少年駅伝競走」として開催されている。広島(陸軍第5師団)呉(海軍鎮守府)という日本でも有数の軍都を結ぶ国道の完成を機に始まったものであった。同じく中国新聞社主催で、1931年(昭和6年)から行われていた中国駅伝(福山～広島間)の“予備軍向け”駅伝といってよいだろう。

戦前から戦後まで続く少年駅伝は全国的にもめずらしいという。伝統ある本大会からは、ミュンヘン五輪(1972年)マラソン代表の采谷義秋選手<sup>うねたに</sup>など、全国的に活躍した名選手を輩出している。

私は、2年生の冬(1962年1月)に初めて駅伝メンバーのレギュラーになった。そして3年生のとき、第23回中国少年駅伝競走大会(1962年、

---

1) 大竹市の誕生(佐伯郡の一部町村が分離独立)1954年(昭和29年)9月1日

昭和 37 年 11 月 26 日)で、最終 8 区アンカーとして旧・中国新聞本社(現・三越)前まで 3.7 km を走った。

### 中国駅伝出場（君原健二と走る）

私は、高校時代には中国駅伝（福山～広島間）出場の経験をさせてもらった。高校 2 年生の冬(1965 年 1 月)のことである。東京オリンピック(1964 年、昭和 39 年 10 月)の興奮冷めやらぬ時期で、東京五輪男子マラソン 8 位入賞の君原健二（八幡製鉄）と、区間こそ違え同じ駅伝に出場したことになる。なお、東京五輪では円谷幸吉が銅メダルを獲得し、次のメキシコ大会では君原健二が銀メダリストとなった。そしてその時、円谷幸吉はすでにこの世の人ではなかった。

中国駅伝は、福山（備後）と広島（安芸）という、広島県東西の二大都市を結ぶ 100 km 余り 8 区間で行われた駅伝で、箱根駅伝<sup>1</sup>と並んで日本を代表する駅伝だった。第 1 回大会は 1931 年（昭和 6 年）2 月 11 日（紀元節）に開かれ、1995 年（平成 7 年）第 62 回大会を最後に「全国都道府県対抗男子駅伝競走大会」として発展的に解消している。なお、昭和 20 年中止、昭和 21・22 年は広島～呉間（往復 56 km）で実施、正式大会としてカウントされていない。

中国駅伝は、私が出場したころ、一般の部、都市の部、そして高校の部と三部制で行われていた。その制度によってこの伝統ある駅伝に参加することができ、出場者名簿に名前が残っているのは大変光栄なことである。

実は私は、“高校の部”では出場しなかった。佐伯陸協 B（都市の部）のメンバーとして出場したのである。当時、我が高校にも駅伝メンバーとして本大会 8 区間（福山～広島間 105.3 km）を満たすだけの人数は揃っていた。しかし、そのメンバーでは独立したチームは組めない、つまり出場は出来ても大会として恥ずかしくない成績は残せないということになった。そこで、我が高校生を佐伯陸協 A・B の両チームに振り分けて出場させて

---

1) 東京箱根間往復大学駅伝競走、第 1 回大会は 1920 年（大正 9 年）1 月実施

もらったのである。

### 佐伯郡出身の強豪・高橋進（君原健二のコーチ）

私の参加した“佐伯陸協”は、戦後再開された中国駅伝において、強豪八幡製鉄を向こうに回して、同じ一般の部（当時、高校の部を加えた二部制だった）で連勝したこともある伝統のチーム（佐伯体連、後に佐伯体協）である。その当時の中心メンバーだった高橋進（現在の広島市立基町高等学校教諭）は、その後八幡製鉄に移籍してさらに活躍を続け、君原健二と入れ替わるようにして引退した。

君原健二のコーチとして有名な高橋進の生まれは、広島県佐伯郡吉和村だと聞いたことがある。旧制広島一中（広島県立広島国泰寺高等学校）の出身で、中学時代の先輩には、オリンピック日本初の金メダリストである織田幹雄（1928年アムステルダム五輪、三段跳び）がいる。高橋自身は、中国駅伝最多13個の区間賞が何よりの勲章と生涯にわたって言い続けたという。

高橋進の4年後輩（旧制広島一中）に望戸豊数があり、中国駅伝にも高橋と一緒にチームで幾度か出場している。望戸豊数はその後、大竹中学校陸上競技部監督（17年間）として、中国少年駅伝（呉～広島間）で14回優勝（9連覇を含む）している。

### 三上剛先生（私の高校時代のコーチ）

大竹中学校駅伝メンバーの一人に三上剛がいる。私の高校の教師であり、陸上競技部コーチでもあった。私が教えを受けた時期は、三上先生が箱根駅伝（日本体育大学）4年連続出場後、教職について間もないころのことである。先生はいつも我々と一緒に走っており、中国駅伝最多出場23回（大竹高校、佐伯陸協、大竹市陸協）で47歳まで走り続けた。

途中4年間、教員異動により所属チームがなくなり、大竹市陸協を自ら立ち上げるまでは、出場すらできなかった時期がある。本来、最多出場記録はもっと多くなっていただろう。（なお、大学時代4年間出場なし）

以上、佐伯郡をキーワードにして、そこに流れる人と人のつながりによって、私たちの中国駅伝参加が可能となった。感謝申し上げるほかはない。

## 第2節 ホームページ開設と山行再開

### 学生時代の私は、山歩きをしていた

学生時代4年間を私は徳島で過ごした。クラブ活動ではワンダーフォーゲル部に所属しており、ホームグラウンドの剣山<sup>つるぎさん</sup>(徳島県)には十数回登った経験がある。また、3年連続で夏の北アルプスに通った。

しかし、それ以降、山に登る機会はほとんどなかった。大学卒業後、関東地方で十数年過ごした中で、小型ディンギーヨット(江の島)に夢中になった時期がある。20歳代半ばから30歳前後のころで、山は、その後30台半ばに登った金峰山<sup>きんが</sup>(奥秩父)、北岳(南アルプス、雨天敗退)の二座のみである。

### 山行再開のきっかけ

私が山行を再開するきっかけとなったのは、ホームページ開設だといってよいだろう。1999年(平成11年)夏ごろ、私は自分のホームページ上で、「薬リンク集」を作り始めた。仕事でよく使うWebを、クリック一つで表示させるための便利集として使うためであった。

しばらくして、日本百名山(深田久弥)に関して一つのアイデアが浮かんだ。社会人が実際に百名山登破することはなかなか大変である。そこで、Web上で関連するホームページをさがして、百名山のリンク集(「日本百名山Webの旅」)を作ろうというのである。

リストは、ほぼ1年(1999年10月~2000年9月)で完成した。そうしたリスト作りのために、多くの方とメール交換をするなかで、ある人から「ところで貴方の山行記はどこにあるんですか」と聞かれて困ってしまった。

それからしばらくして、二十世紀最後の年である2000年(平成12年)7月に、私は学生時代以来30数年ぶりに山行を再開した。自宅近くの鈴ヶ峰(東峰312m)からゆっくり歩き始め、慣れてくるにしたがって、広島市あ

るいは近郊の山まで足をのばしていった。それにつれて、私の山行記も少しずつ充実したものになっていった。

翌年 2001 年 11 月には、西中国山地に初めて足を踏み入れ、3 週連続で吉和冠山、十方山、そして恐羅漢山（広島・島根最高峰）を登っている。なお、山行記の名前は、中国新聞社の山の本の題名からとって、「ひろしま百山（私の踏み跡）」とした。（後に「中国地方の山 100 選」（私の踏み跡）と改題）

中学・高校時代の陸上競技、そして学生時代のワンダーフォーゲル活動というように、自分自身の足を使って行動するという行為は、私にとって最も基本的な快感の一つとなっているようである。

### 団塊の世代一代記

私は、いわゆる「団塊の世代」一期生（昭和 22 年度生まれ）に属している。「団塊の世代」の命名者である堺屋太一によれば、「日本民族は終戦直後の 1947 年から 1949 年にかけて、空前絶後の大増殖を行った。この 3 年間に生まれた日本人は、その直前よりも 20%、直後よりも 26% も多いのである」（堺屋著「団塊の世代」より）。原因は、第二次世界大戦で日本が負けたことにある。大勢の男性がいつせいに内地へ復員して、ベビーブームがおこったのである。

「団塊の世代」は、戦争を知らない世代に属している。しかし、戦争の結果生まれてきた世代であることは間違いない。私の暮らす広島は、世界で初めて原子爆弾を投下された都市である。戦艦「大和」を建造した呉海軍工廠（呉市）も近くにあった。江田島（海軍兵学校があった）は海のすぐ向こうにみえている。戦争に無関心でいることは、私にはできない。

ホームページを開設してから、エノラ・ゲイ、広島に原爆（原子爆弾）投下、戦艦「大和」や神風特攻隊（特別攻撃隊）など、思いつくままに書き連ねて、「団塊の世代一代記」のコーナーにまとめてきた。その他では、各種スポーツ関連、考古学や事件・事故などについて書いている。なお、薬関連の文章は、「日本の薬害・公害」として独立させた。

### 自分メディアとしてのホームページ

私のホームページは、インターネットにつないで、いつでもどこでも使える自家製百科事典をめざしている。一人で作るウィキペディア (Wikipedia) といったところである。項目数こそ、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』にはるかに及ばないけれども、項目ごとの内容では決してひけをとらないつもりである。文章作成の方針として、事実関係をできる限り正確に把握して、事の成り行きを時系列で整理する、ということを心がけている。

ホームページを開設してから、実に多くの方々と主にメール、時にファックス、あるいは電話でお話をさせていただいた。ほとんどが未知の方である。なかには、私の文章の間違いや曖昧な点を正してくださる方もいらっしゃる。そうした方々とメール等のやり取りをする過程で、元の文章が見違えるように良くなっていくのを実感する時ほどうれしいことはない。

さらに、直接お会いする方もでてくる。故・原哲之さんもその一人で、私と細見谷溪畔林を結びつけるキッカケとなった小型サンショウウオ調査&観察会(2002年8月)は、彼の紹介によるものであった。その他にも、ホームページを通じた山友達の輪が広がっている。

情報発信基地としてのホームページは、手軽に運営できる「自分メディア」として、大変すぐれた有用なツール(道具)といえる。本書の誕生も、この「自分メディア」なくしては有り得なかったと考えている。

## 第3節 西中国山地の魅力

### 桑原良敏著「西中国山地」

西中国山地を歩く人にとって、桑原良敏著「西中国山地」溪水社(1982年)はバイブル的存在となっている。私は、同書(1997年復刻版)を2001年12月に購入した。本書がまだ品切れになる前のことで、一般書店で購入している。

著者の桑原良敏さん(広島女学院大学名誉教授)は、2001年12月に75

歳でなくなった。中国新聞「悼記」では、「広島島の裏山」愛し続け名著残す」と題する署名記事で、桑原著「西中国山地」について次のように紹介している。同紙編集委員・山内雅也さん（2001年12月11日付け）

地元の古老から聞き書きした谷々の名を刻んだ山の概念図、山名の由来を古文書などから考察した地名考、動植物の分布を記録した博物誌から地形、生物の方言まで収め、登山書としては例を見ない異色の内容に目を見張った。

なお、同書初版巻頭には、故・今西錦司さん（1992年没）から、『西中国山地』に寄す という一文が贈られている。

## 同行山行

私の山行では、初期のころは単独行が圧倒的に多い。家族あるいは親族以外の方と本格的な山行で一緒したのは、広島市内在住の“Iさん”が初めてである（2005年5月）。そして、その縁を取り持ってくれたのが、桑原著「西中国山地」だった。

当時すでに、本書は初版はもちろんのこと、復刊版も「幻の書」になりつつあり、広島市内の古書店では、定価3,500円（税別）の5倍の値付けをしているところもあった。そうした中で、私が買い増していた一冊をアマゾン（インターネット書店）で売りに出して、“Iさん”に買っていただいたのがキッカケだった。

通常取引ならば、本の受け渡し（郵送）をすれば、それでおしまいである。しかし、アマゾンを介した手続きに不都合があり、メールの交換をしているうちに、“Iさん”と私の西中国山地に対する思いの波長が合い、同行させていただくことになった。

“Iさん”と私の同行山行は、黒ダキ山と沼長トロ山の2回である。これら二つの山は、細見谷深谷（細見谷川下流部）をはさんで、南北に対峙している人影の少ない静かな山である。桑原「西中国山地」P.109によれば、



黒タキ山（マ）周辺の山と谷は最も足繁く通った場所の一つである。山頂周辺に立って瀬戸谷や細見谷下流部溪谷を眺めて見るとよい。鬱蒼とした広葉樹の樹海に覆われており、樹林の好きな者を魅了する不思議な雰囲気を持った場所と言える。

場所の選定は「Iさん」が行った。なかなか渋い山域を選んだものである。黒タキ山では、登山口に取り付いてすぐに私がバテたり、沼長トロ山では、樹冠に覆われた登山道で現在位置を見失ったりと、いずれも思い出深い山行となっている。

### 広島山稜会（会報「峠」）

桑原良敏さんが所属していた山の会の名前を「広島山稜会」という。桑原さんは、広島山稜会発足当時（1959年、昭和34年3月2日発会式）からのメンバーの一人であった。その山稜会では、会報「峠」（たお、と読む）を出しており、1994年（平成6年）11月26日には、創立35周年特集号（通刊第32号、限定300部）を発行している。

私は、2006年秋にその特集号を閲覧させていただく機会を得た。堀啓子さん（広島山稜会元会長）の特別の計らいによるものである。堀さんとは、2005年7月に開かれた環境保全調査検討委員会（第7回）を傍聴した後で、メール交換をして親しくさせていただくようになった。元々、大学（薬学部）の10年先輩後輩の間柄なのだが、それまできちんとお話しする機会はなかった。

さて、記念誌は、全体で千二百ページになろうかという大部（全一冊）のものである。巻頭に、野間弘・広島山稜会会長の挨拶「記念誌発行に当たって」が載っているため、その一部をご紹介します。

私達には、国内の困難なルートを開拓したとか、ヨーロッパアルプスの記録的な登攀をしたとかの輝かしい記念碑はありません、県北を主に中国山地の1,000メートルクラスの間々や、未だ登山者が入っていない未知の谷や、深い山をもとめて歩いてきました。私達のホームグ

ランドである恐羅漢の山麓にひえばた小屋を建設して、無積雪期から残雪期、そして厳寒期の雪山の前進基地とし、周辺の山を開拓してきました。

広島山稜会は、あと三年足らずで創立五十周年を迎えることになる。特集号の編集も始まったと聞いている。完成の暁には、ぜひ再び閲覧を許していただきたいと願っている。

### ひえばた小屋を訪問する

私は、広島山稜会の行事に一度だけ参加させていただいたことがある。これまた堀さんのご紹介で、2006年夏のある日、広島県最高峰の恐羅漢山（標高 1,346.4 m）に東側の牛小屋高原から登り、北西斜面のブナ林を楽しみながら台所原へ下った。そして、管理林道～夏焼峠経由で出発地点に帰着後、山稜会の山小屋（ひえばた小屋）にお邪魔をして、コーヒーをご馳走になった。

「ひえばた小屋」は、広島山稜会発足から3年たった1962年（昭和37年）11月26日に落成式を迎えている。地元の方が所有していた土地および建物の買い取りから改築まで、要した資金および労力は、すべて会員の力のみで賄ったものである。会のシンボルとして今後も存続されることを祈念してやまない。

### 加藤武三之碑（内黒峠）

恐羅漢山を愛した登山家の一人に加藤武三がいる。加藤武三は、広島山岳界の草分けとして、戦前・戦後を通じて活躍、1973年（昭和48年）10月に61歳で病気のため亡くなった。翌年、“山毛櫛会”によって追悼碑が内黒峠に建立され、一周忌に除幕式が行われた（碑銘「加藤武三之碑」）。

その昔、雪の季節に故人の好きだった恐羅漢山をめざすには、内黒峠越えの道が唯一のものであった。碑に刻まれた故人の詩は、“雪路を四時間”歩いて登り、内黒峠に立ったときの情景を、亡くなる数年前に読んだものだという。除幕式直前の中国新聞記事（1974年、昭和49年10月8日付け）

は、加藤武三について次のように紹介している。

昭和二十五年に同好者を集めて広島山の会（三十九年に山毛櫛会に）を結成。山に関するエッセーや詩を書きながら、「何も遠くの、高い山に登るばかりが登山ではない。県内にも素晴らしい自然と緑があるではないか」をモットーに、県下の大小ほとんどの山を踏破。その体験を「広島をめぐる山と谷」シリーズ（十九巻）にまとめて紹介するなど地元の手ごろな登山・ハイキングコースの発掘に尽くした。

代表作：「焚火」広島山岳会（昭和15年、1940年）遺稿集：「加藤武三詩画集・続焚火（「焚火」覆刻版付き）」高見和成（平成4年、1992年）

### 西中国山地の魅力

西中国山地の山々は、百名山（深田久弥）ではもちろんなく、二百名山（深田クラブ）にも入らず、確か三百名山（日本山岳会）からもはずれているはずである。

それでも人を引き付けてやまない何かがある。山の上では、冷温帯落葉広葉樹の深い森にツキノワグマをはじめとする動物たちが暮らし、その下には、人々の暮らす里山があった。ヒトと動物が棲み分ける樹林帯の色濃い自然が、「西中国山地」の魅力の一つであることは間違いない。

AKIMASA.NET

<http://www.akimasa21.net/>

「細見谷溪畔林と十方山林道」

第23回中国少年駅伝競走大会(呉～広島間)



写真転載：「中国新聞」昭和37年（1962年）11月23日付より

私が出場した中学3年生のとき（11月26日）のコースは、中国新聞呉支社前から旧・中国新聞本社（現・三越）前までの8区間28kmであった。この写真は、最終8区（大洲橋～ゴール3.7km）で4位争いをしている時のものである。

---

ストップ・ザ・「大規模林道工事」(工事主体は緑資源機構)。21世紀は環境の世紀といわれています。2007年夏の全国的な極暑は何を意味しているのでしょうか。また、多額の負債をかかえる国や地方公共団体の財政はどうなるのでしょうか。環境問題、財政問題ともに、今や待たなしの状態です。私たち一人一人が、自ら判断して決める時がきています。